

第一章

二十一年目の手紙

美紫緒さん

あなたに最後にお会いしてから二十一年の月日が経ちます。いかお過ごしでしょうか。あなたは、僕より一週間だけお姉さんですからお互いにすでに四十一歳になっている筈です。あなたが、その後どのように変貌されたのか、僕には想像もできません。僕の脳裡には、二十^{はたち}の頃の、あるいは最初にあなたを見た時の笑顔しか浮かびません。それは僕にとっては永遠のものです。決して変わることはないものです。僕は二十歳の時、あなたに求婚しました。その言葉を聞いてあなたが「うふふ」笑ったあの瞬間もはっきりと覚えています。新宿の「プチ・モンド」、あそこには今も僕の青春があるような気がします。

あなたが、遠くの人を眼で促してニコニコの笑顔で「あそこの人はお見合いしているのよ」といつ

た言葉なども、あなたの美しい声の響きとともになぜかよく覚えています。僕には他人に目配りする余裕もなく、また関心もなかったのでしょう。「あそこの人」が誰か分かりませんでした。プチ・モンド。あなたとのささやかな思い出を留めるにはまことにふさわしいフランス語ではありませんか。あの頃のこととはまた後に触れることにして、僕がなぜあなたに手紙を書く気持ちになったのかについて触れておきます。

僕はつい一週間ほど前に法学博士の学位を取得しました。法学博士というのは、理科系の博士や文学博士と違って、わが国では現在年間十名から三十名くらいの人しか取得できません。その意味では稀少価値のある学位です。法学部の場合、教授になり、五十歳を過ぎてからとるのがもっとも多いケースですが、しかし、一流の大学でも教授陣のわずかしか持っていないのが現状です。僕の大学でもその例に漏れません。その意味で、この時期に論文が認められたことを嬉しく思っております。特に、今回の僕の学位論文の審査は、公法学の最高権威である碩学の先生方の審査にかかるものでした。

自分でもよく分かりませんが、論文を書き終わると、なぜかずっとあなたのことを思うようになりました。ある時はしみじみ昔を懐かしみ、ある時は激しくまるで青春の情熱が蘇^{よみがえ}ったかのように昔のことが思い出されます。手紙を書きたい。歩きながらも、電車のなかでも、眼を覚ました床の中でも、あなたに語りかけている自分を発見します。きっと自分もやっと一人前の学者になったというのを、あなたに知らせたいのでしょう。あるいは、お別れして以来ずっと胸の奥にしまっておいたあなたへの思いがやっと出口を見つけて迸り出てきているのかも知れません。

「いまさら手紙」という気持ちも、ない訳ではありません。しかし、僕はこれまでもそうであったように、自分の今なお消えないあなたへの純粋な気持ちを殺す必要性をついに認め得ないのです。

思い出します。十三年前にあなたにお電話したときのことを。僕の声が聞くなり「美高さん」とすぐに気づいてくれたのは嬉しかった。そしてすぐに「私が後悔するような立派な人になった？」と聞きました。あの時の僕は、事情があつて精神的に疲弊していました。どうしても、あなたの声を聞きたいという衝動を押さえることができませんでした。あなたの声を聞かずに生きて行けない気がしていたのです。

あなたは、熊本之母親からの電話で「女子美時代の友人から、住所・電話を尋ねる電話があつた」と聞いた時、美高さんではないかと思つたと言いました。あなたの住所と電話を知るために僕は相当の努力をしたのですが、そのことは今は書きません。

十三年前にお電話した時、僕は独身でした。あなたにはもう記憶がないかもしれませんが、あの時あなたは結婚したのかとは聞いてくれませんでした。否、僕が結婚していることを前提にした話し方でしたので、僕もなぜだか独身だと言ひそびれた記憶があります。そのため、あなたに対する気持ちに何の変わりもないことを何一つ伝えることもできずに電話を切らざるを得ませんでした。

その後、偶然から結婚しました。妻は蓉子、旧姓を藤木といいます。藤園中学の先輩ですし、あなたとお話したことがあるようですので、きつとご存知だと思ひます。

今、法学博士の学位をとつたから立派になつたなどと考えている訳ではありません。また、あなたを見返そうなどという考えなど僕とはまったく無縁のものです。自分の「憧れ」を見返す必要がどこにあるでしょうか。ただ自分としては学問の道を選んでそれが誤つていなかったこと、今度の研究が少しは社会に貢献できるかもしれない等々、人生の一区切りがついた気持ちがいふのです。

そこで僕の青春の全てであつたあなた、青春の全てを賭けて恋し愛したあなたに近況報告の手紙を

書くことは許されるのではないか、あなたも許して下さるのではないかと勝手に考えてペンをとることにしたのです。

僕は若い頃から時々おなかに激痛が走ることがあり、持病と考えていたのですが、短時間で治まるので特に気にもとめていませんでした。ところが、これが数年前からだんだんひどくなり、数度検査入院しても原因不明ということで、その後飛び飛びにですが、合計半年以上も入院を繰り返すことになりました。あるとき激痛がひどく、病院に運ばれると即入院せよということでした。東京では面倒を見てくれる人もいないので、熊本の実家に帰って熊本大学病院に検査のため入院しました。その時も原因不明という結論でしたが、後に胆石ということで手術をしました。

退院して初めて母と二人で町に出た折り、母が藤木の家の前を通るとき、「藤木さんはまだお嫁に行っていないみたいよ」というので、ふとそれじゃ俺が申込んでやろうかと思いました。というのも、昔、兄（現在は医学部教授）が帰省した時、何年かぶりに熊本で彼女とばかり会ったことがあり、僕に「藤木さんが綺麗になっていた、彼女と結婚しようかな」と言ったことがあったからです。兄がそんなことをいうのは初めてだったので、僕は太い賛成し叱咤激励したことがありました。しかし、兄は遂に電話もかけず、それっきりになってしまいました。

僕は蓉子のことはそれまで見たこともなかったのですが、兄がいいと言うのなら悪い女ではあるまいと思ひ、東京での独身生活に飽きていましたし、親も煩くなってきたので、結婚しようと考えたのです。当時彼女は高校の英語教師をしていましたが、辞めて東京にきてくれました。

今僕らは八王子に住んでいます。結婚当初は中野新橋のマンションに住みました。二十の頃の僕が、身を焦がす程に思った「杉並区の堀之内（あなたの下宿）」と女子美術大学は目と鼻の先にあ

ります。昔、女子美に行っていた友人の従姉妹から、あなたの住所を調べてもらった後、僕はあなたの住んでいる下宿を探し訪ねたことがありました。あの頃の記憶を辿って、あなたのいない、しかし、あなたのかつて住んだ街を、あなたを想いながら、夕暮れ時によく散策したものでした。

その後、僕にも二人の子どもができました。長男は小学一年、長女は三歳です。女の子ができたら美紫緒とつけようと思っていました。しかし、あなたが好きだったことは蓉子にも言っていたので、さすがにそれはできませんでした。

一番好きな人と結婚できなかった僕にとって、結婚は大して意味のあることはありませんでしたので、ある意味では相手は誰でも良かったのです。しかし、それでも、若干は僕なりの好みというものがあった訳ではありません。もっとも、蓉子はちょっと見込み違いでした。大変な秀才というので、僕は気の強い女だと勝手に信じていました。女房は少しくらい気が強い方がよいだろうというのが僕の考えでしたし、教師にせよ何にせよ、女性も自分の職業なり生き方なりをきちんと持っている人がよいと思っています。

ところが、一緒になって見ると、この人はとっても気が弱くて、決して僕の予想したような人ではありませんでした。しっかり専業主婦に納まっています。しかし、とても控え目で、こっちが怒っても決して反抗せず、風呂だつて僕より先に入ったことがあります。気持ちも、とても純粹で優しい人です。自分の短所を考えれば、恐らく過ぎた女房なのでしょう。僕の英語の論文の校正などは、元英語教師だけあつて安心して任せられますが、文献のコピーなどが上手にできないなど信じられない程不器用なところもあります。しかし、ともかくも恙なく暮らしております。

僕には、あなたが今どのような境遇にあり、何を考え、どのように暮らしているのか何の知識もあ

りません。あなたの結婚についても、何の情報も持ちあわせていません。あなたが何時結婚なさったのかも、相手が誰であるかも知らないし、また強いて知ろうとしたこともありませんでした。

唯一の知識は、十三年前にお電話したとき、あなたが昔と変わらず張りのある、僕の大好きな声をしていたこと、「私には六人の子供がいるのよ」といったこと（もつとも、六人は少し多すぎると思っ
ていますが）くらいです。とても幸せそうな印象を受けました。これがあなたと最後にお別れしてから、この二十一年間に知りえたあなたに関する知識の全てです。きっと素敵な恋をして、素敵な方をお選びになったことでしょう。

ときどき思います。美紫緒さんと結婚できなくてよかったと。あなたにこんな苦労はかけられなかったと。しかし、もしもあなたが僕のものになってくれていたら、僕の人生もすっかり変わったものになっていたのではないかとは思いますが。当時の僕はあなたのためなら死ぬことさえできたのですから。しかし、あなたは僕に何も求めることがなかった。

いや、そうではない。そうではないたった一つのことがあります。僕が悔いても悔いきれぬことがある。そのことを僕はこの二十一年間何度となく思い出しては、齒軋りする思いで悔やみつづけてきました。僕の人生の最大の汚点であり失敗です。もしも時間を逆に回すことができるのなら、あの瞬間だけは、もう一度やり直しをさせて頂きたいと切に思う。愚かだった、まことに愚かだった。

しかし、あの失敗の中に自分の本質があることを自覚したのは、少し後になってからのことです。爾來、あの瞬間は僕に存在のアイデンティティーを絶えず問いかけずにはいなかったし、僕の男としての重い課題となりました。もし人間に飛躍ということが可能であるならば、「あの瞬間」を克服する以外に手がないのだ、と僕は考えるようになりました。あの瞬間に露呈した自分の本質を克服しな

いことには、美紫緒に顔を合わすことができない、それが僕の直観でした。しかし、過ぎてしまったあの「瞬間」をどのようにして変えることが出来るでしょうか。

今度、僕の書いた博士論文は、あの瞬間を埋め合わせる意味を持っているのです。少なくとも自分の内部では。僕は生まれて初めて努力らしい努力をしました。論文のテーマは長年にわたって研究してきたのですが、論文として書き始めたのは二年ほど前からです。この間、僕は血の滲むような勉強をしてきました。冬休み春休みの長期休暇はもろろのこと、週二回の講義のために大学に出掛けることを除けば、家から一步も出ず、人とも会わず、あらゆる時間を惜しみ、日に十五、六時間は勉強に打ち込んできました。肉体の限界まで勉強したといっていると思います。トイレに立つ以外は、机にかじりついていた。しかし、こうしたことはすべて僕の内面の闘いであり出来事です。こんな事を聞かされても、あなたとしては、きっと何の戯言かといった気持ちを抱かれることでしょう。あなたに求愛する資格のないままに結婚を申し込み、ある意味では、愛している、好きだとだけ叫んで、何らなす術もなく、手も握れずにみすばらしく立ち去った男の責任の取り方として報告を聞いて戴ければよいのです。

その「瞬間」が何を意味するのかは、聡明なあなたのことですから、すでにお気付きだと思います。大学入学のため東京に出てきた後も、失恋の傷は癒えるどころか、自分にはあなたに近づく資格はないという落魄ろくはくの心境にありました。人生の先に希望さえ描くことはできず、傷を誤魔化しながら生きるほかありませんでした。

目標喪失の時間が天恵となったのでしょうか、大学の講義に刺激されて次第に法律学が面白くなり、別人のように勉強し始めました。生活の基軸が勉強に定まると、不思議なことに他の夾雑物は消